ごくさりげなく　あたりまえに

園長　打田和夫

人生にとって高齢期は、最後の仕上げの時期であるといえましょう。戦争も体験し、人によっては波瀾万丈であった人生、あるいは平穏無事であった一生の終着点でもあります。この高齢期を、健康で、楽しく、のびのびと暮らしたいという気持ちは誰でもが納得するものです。

高齢期という人生の総仕上げの時期だからこそ、自分で選びとる自由、本人の趣味、自主性を生かした生活がおくれることが重要なことです。

真の豊かさとは何か？この問いが日本のあちこちで語られるようになりました。

真の豊かさは、モノやカネでなく、うるおいのある住空間と多様な価値観が認められる社会。

それは、選択肢の豊富さ、個性的な余暇、友情、自己決定が尊重される世の中を実現することだと思います。

しかし、ただ五体満足で健康な自分自身を念頭において「真の豊かさ」が語られているように思われます。それだけでは、「ただの豊かさ」にすぎないのです。

老いた人も障害をもった人も、同じように「うるおいのある住空間」を持つことができ、「多様な価値観」や「豊富な選択肢」を保証され、「個性的な余暇」や友情や恋愛を味わうことができ、「自己決定」が尊重される、それも、ごくさりげなく、あたりまえにできる。そういう社会が実現してこそ、「真に」豊かな社会なのではないでしょうか。

なぜ、人間だけが親孝行するのでしょう。

なぜ、人間だけがハンディをもった仲間を支えるのでしょう。

それは、生を受けた人すべてと共に生きようとする道。「弱肉強食の本能」に逆らう道。それこそが、人間の人間らしい道なのではないかと、私は思う。

今年度、車椅子2台を寄贈いただき、大切に使わせて頂いております。誠に、有り難うございました。

プルタブ回収運動遂に175万個達成！

白鷹町立東中学校の生徒の皆様、そして地域の皆様の情熱の込もった貴重な車椅子を頂戴し、誠にありがとうございました。

平成10年度東中生徒会スローガンは「For the earth ― 誰かのためにできること ―」でした。その下に"ハートフル"活動が行われ、"誰かが見ていようと見ていまいとほめられるためにやるんじゃない、誰かの為に自分ができることをやることが大切だ"と言う生徒さんの言葉に感激しました。その熱い思いは、確実にお年寄りの皆様に伝わりました。

地域の方々とのふれあい、コミュニケーションのあり方は、施設にとって1つの大きな課題です。その中で、今回の出来事は非常に新鮮でした。次代を担う若者との、新しい関係が誕生したように思われます。この絆を大切に、今後ともよろしくお願い致します。

プルタブから車いすへ

白鷹町立東中学校三年　石井健二

これまで、私達執行部は、先々代からのプルタブ活動を受けつぎ、がんばってきました。このたび、その成果が、車いすとして実ったわけです。しかし、この華々しい成果にも二年間という長い苦労がありました。

私達が一年生の夏、会長の小形さや香さんの「プルタブの輝きは、命の輝き」ではじまりました。そのころは、百四十万とはあまりにも大きい数字で、本当にできるのか不安でした。二年生になって、活動は学校内から、地域に広がり、プルタブの数はどんどん増えました。そして今年、車いす贈呈式を行うことができました。今までの苦労がむくわれて、感動でした。この後も、常時活動として、プルタブ活動を続けることになりました。

また、文化祭では、樋口ときさんが、私達がおくった車いすでおいで下さって、感激でした。まさに、プルタブは、命の輝きです。

郵政互助会の皆様の熱意に感謝申し上げます。

昨年、8月25日に郵政互助会の皆様より、車椅子1台を寄贈いただきました。お年寄りに大変喜ばれ、有意義に使わせて頂いております。

ずーと地域の皆様と共に

鮎貝郵便局長　廣瀬健治

21世紀を目の前にし、郵便局は今、大きく変わろうとしています。

明治四年創業以来、身近な国の窓口機関として、皆様に大変お世話になりながら、全国2万4千のネットワークにより、あまねく公平なサービスを提供し、独立採算で健全な経営をし、税金からの補助は一切受けずに、ただひたすら地域のために貢献して来ました。

さらに身近で、ますます便利で安全な郵便局であるために、地域の「情報の拠点」「安心の拠点」「交流の拠点」となろうと考えています。私達の白鷹の里が、あかるいあいさつや笑顔で満たされ、住みやすい街になるために、郵便局がお手伝いをし、よりよいコミュニケーションを育みたいと思っています。

この度、私達郵便局職員で作っています「郵政互助会」の特別なはからいで、貴園に車椅子を贈らせて戴きました。心ばかりのものですが、意のあるところをおくみ取り戴ければ幸です。